

画家
甲斐千香子

KAI CHIKAKO / Artist

PORTFOLIO

ARTIST - KAI CHIKAKO - OFFICIAL WEBSITE / PORTFOLIO FILE
2025.06/19 FIX FILE ©Availchica / kaichikako.com



画家

甲斐千香子

KAI CHIKAKO / Artist

BRIEF HISTORY - 略歴

1987年生 宮崎県出身 武蔵野美術大学造形学部 日本画コース 卒業

日常の風景や人々の営みに潜む「おかしさ」をテーマに日本画技法を用いながらアクリル絵具やキャンバスなど、ミクストメディアを取り入れた絵画を制作。見慣れた物事や景色を自由に組み合わせ、独自の感性と視点で創造するその作品は"遊び絵"や"見立て絵"の要素を持ち、様々なアートショーなどで高い評価を受けている。

近年では「渋谷・宮下公園 アディダスブランドセンター」RAYARD MIYASHITA PARK 店舗内装への作画提供や NHK ドラマ 10「大奥」福士蒼汰ほか衣装の絵付けを担当するなど多方面で活躍している。

STATEMENT - ステートメント

見慣れた景色に潜む、もうひとつの構造を描き出す。

私は日常風景や人々の営みに潜む「おかしさ」を身近な物や景色を身近な別の物に置き換える"見立て遊び"を手法として、日本画材とアクリル絵具を用いて絵画制作している。例えば、宝石に群がる人々の様子を昆虫に置き換えると、"スイカに集まる虫たち"のイメージが浮かんでくる。ある事象を別の物に見立てて連想し、そこから得られるユーモアとシュルレアリスムを制作イメージの根幹に置いている。

制作手法においては、幼少期に触れた"図鑑"や浮世絵の一種である"遊び絵"が影響している。

幼少期、世界中で起きている複雑な事象を単体として認識はできたものの、理解できない事が多かった。しかし、それらのイメージを分解して図や数式、物語のように連想していく図鑑や、浮世絵における見立て絵、遊び絵などの手法を知ることによって、その事象の意味や自己との関係性を一目で理解することができた。

楽しみながら様々な物事を理解できるという点で"図鑑"と"浮世絵"の共通点はとても多く、文字に頼らずに広く情報伝えること、イメージを置き換えて連想しながら繋げていく表現手法に魅力を感じるようになった。歌川国芳(1798-1861)の「みかけはこわいがとんだいい人だ」のように、錯視と教訓を交えた絵の他にも、学術的な視点と芸術的な視点が1枚の絵に並存しているボタニカルアートの影響も大きい。

日常の本質を自身のフィルターを通して再構築することで、現代の様々な見えなかった側面を映し出す。見慣れたものや固定観念に対して、独自の視点と仕掛けを持つ新たな絵画表現の追求をしている。

2025.06.19 甲斐千香子

SOLO EXHIBITION - 個展

- 2024 記憶の鱗 (GalleryTK2/ 日本橋)
2024 Scales(Steps Gallery/ 銀座)
2024 Re+exhibition 『玉虫の影』 (GalleryTK2/ 日本橋)
2023 転生図鑑～死ないものたち～ (Steps Gallery/ 銀座)
2023 甲斐千香子個展～あそびそなえ～ (松坂屋上野店 アートスペース)
2022 ツメコウボウ (Steps Gallery/ 銀座)
2022 甲斐千香子作品展 (GalleryTK2/ 日本橋)
2021 理想工作 (GalleryTK2/ 日本橋)
2021 かさねがさね (Steps Gallery/ 銀座)
2021 甲斐千香子作品展 (GalleryTK2/ 日本橋)
2020 アツゲショウ (GalleryTK2/ 日本橋)
2019 転生図鑑 (TKGALLERY/ 日本橋)
2019 移植住 (Steps Gallery/ 銀座)
2019 住む、ピース@千波湖 (好文カフェ / 水戸)
2019 住む、ピース (ジョイフル本田 ひたちなか店 / 茨城)
2018 しゅうちやく、 (Steps Gallery/ 銀座)
2018 遺影風景 (space2*3/ 日本橋)
2016 日常麻痺 (Steps Gallery/ 銀座)
2015 Indecision (Gallery FREAK OUT/ 東京)
2011 ヒガムコパニック (東向島珈琲店 / 東京)
2011 かいちかこてん (こすみ図書 / 東京)

GROUP EXHIBITION - グループ展

- 2025 Art Cocktail 2025 (Steps Gallery/ 銀座)
2025 ART365(松坂屋名古屋店 SOMSOC GALLERY ブース / 名古屋)
2024 ART365(大丸梅田 SOMSOC GALLERY ブース / 大阪)
2024 Artist New Gate ~三番町セレクション~ (SAN BANCHO GALLERY/ 東京)
2024 第 4 回 ARTIST NEW GATE ファイナリスト展 (あべのハルカスアートギャラリー / 大阪)
2024 SOMSOC ART SHOW 24S/S(SOMSOC GALLERY/ 原宿)
2024 MOMENT and FRAGMENT - 瞬間と断片 (蔵元 SAKE&GALLERY/ 石垣島)
2023 ART SHOW GINZA ONBEAT × MITSUKOSHI(銀座三越 / 銀座)
2023 静寂と躍動の交差点 (HOTEL & RESIDENCE ROPPONGI/ 東京)
2023 第 48 回宮崎ムサビ展 (宮日会館パピルスギャラリー / 宮崎)
2023 京都×アートプロジェクト (ゲストハウス京と家七条塗師町 / MASATAKA CONTEMPORARY)
2023 Tatsucon Selection 2023 -Osaka-(ART GALLERY UMEDA/ 大阪)
2023 ギャラリーコレクション 2023 『忘れない』 (Steps Gallery/ 銀座)
2022 うきよめぐり (MASATAKA CONTEMPORARY/ 日本橋)
2022 第 24 回三井不動産商業マネジメント・オフィース・エクスピション
2022 遊・桜ヶ丘 現在進行形 野外展 2022(ゆう桜ヶ丘ギャラリー / 東京)
2022 GINZA ART FESTA 併催 “Artist! × Artist! × Artist!” MATSUYA Contemporary Art Selection(松屋銀座 / 銀座)
2021 第 8 回清州国際現代美術展 『再び対話する風土』 (シエマ美術館 / 韓国)
2019 第 45 回宮崎ムサビ展 (宮崎県立美術館 宮崎)
2019 FAVORITE2019 (Steps Gallery/ 銀座)
2019 東京インディペンデント 2019 (東京藝術大学陳列館 / 東京)
2017 ゲンロンカオス * ラウンジ新芸術校第 2 期生標準 コース成果展『ハプニング (直接行動) を待ちながら』 (ゲンロンカフェ / 東京)
2017 On the Steps (Steps Gallery/ 銀座)
2016 On the Steps (Steps Gallery/ 銀座)

ART FAIR - アートフェア

- 2023 アートフェア東京 2023 (インターチュート 7 / 東京国際フォーラム)
2022 3331 ART FAIR 2022 (インターチュート 7 3331 Arts Chiyoda)
2022 アートフェア東京 2022 (インターチュート 7 / 東京国際フォーラム)
2021 3331 ART FAIR 2021 (インターチュート 7 3331 Arts Chiyoda)
2021 アートフェア東京 2021 (インターチュート 7 / 東京国際フォーラム)

AWARD - 受賞

- 2024 第 9 回 SHIBUYA ART AWARDS - SHIBUYA 賞
2024 第 4 回 ARTIST NEW GATE - ターレンス賞

MEDIA MIX - メディアミックス

- 2024 映画「八犬伝」伏姫役 土屋太鳳 衣装繪付け
2023 NHK ドラマ 10 「大奥」主演・福士蒼汰ほか衣装繪付け
2022 島田宇平商店 | 店舗内装 (アート作品提供)
2022 ホテル & レジデンス 六本木 ホテル内装 (アート作品提供)
2020 アディダス ブランドセンター RAYARD MIYASHITA PARK (作画提供)
2020 LETTING GO OF FANTASIES 「空想を解き放て」 MV (作画提供)
2020 アクセサリーブランド by onico. collaboration vol.3 (パッケージデザイン)

MAGAZINE - 雑誌

- 月刊アートコレクターズ 2025 年 4 月号 「誌上頒布特集」掲載
武蔵野美術大学通信教育課程月刊誌「武蔵美通信」2024 年 11 月号 卷頭インタビュー「アートのチカラ」
月刊アートコレクターズ 2021 年 8 月号 「これから来る! 注目の若手 67 人」特集掲載
月刊アートコレクターズ 2020 年 6 月号 「誌上頒布特集」掲載
月刊アートコレクターズ 2020 年 2 月号 「完売作家全データ 2020」特集掲載

and more.



「墮落涅槃図」

1710 × 3800mm／六曲一隻 屏風・アクリル／2016



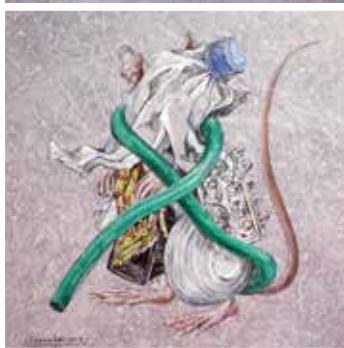
「遺影風景」

東京に住んでいると、すぐに街並みが変わる。私は記憶の更新に頭が追いつかず、しばしば新しい景色に古い景色を重ねて見ている。その度に、過去の風景に囚われている未練に似た寂しさと、新しい場所に来たような新鮮さ、更にはそこにいる私の姿を無理に当てこもうとして、気持ち悪くなる。きちんと過去の風景とお別れができるないようだ。風景もお葬式のように、死を受け入れるための"お別れ"が必要なのかもしれない。個人的な風景や、いつかなくなってしまうであろう街並みを偲び、遺影として描く。



「しゅうちやく、」

ある日、一つの小さな苗木を買ったことがきっかけで私は観葉植物の収集にハマった。新しい種類の植物を見つけては買うことを繰り返し、幾つもの販売店の情報を調べ集めて巡っているうちに、あっという間に数十種類も集まつた。大量の植物を育てきれなくなる心配よりも、枯れてその種類の植物がなくなってしまう不安の方が強く、枯れた時の予備としての植物も集め始めた。そしてできたオリジナルの巡回路を周り、新たな植物を求めて盲目に同じ動きをグルグルと繰り返しているとき、例えようのない幸せな気持ちで満たされる。まるで終着点のない双六の世界に落ちてしまったようだ。



「転生図鑑」

私たちは、無くしたり、捨てたり、人にあげたりと、様々な形で所有物を手放しては、また新しいものを求める。ただ、そんな日々の中で手放したものが違う形で存在していたら手放さずに持ち続けていたかも知れないと、時折思う。もし、ヘアゴムがペットだったら髪を短くして使わなくなったとしても世話をし続けていたかも知れない。もし、スマートフォンが保存食だったら壊っていても保管していたかも知れない。今回、私が所有していたものたちのもう一つの運命を想像し、記録する。



chikako kai 2019.

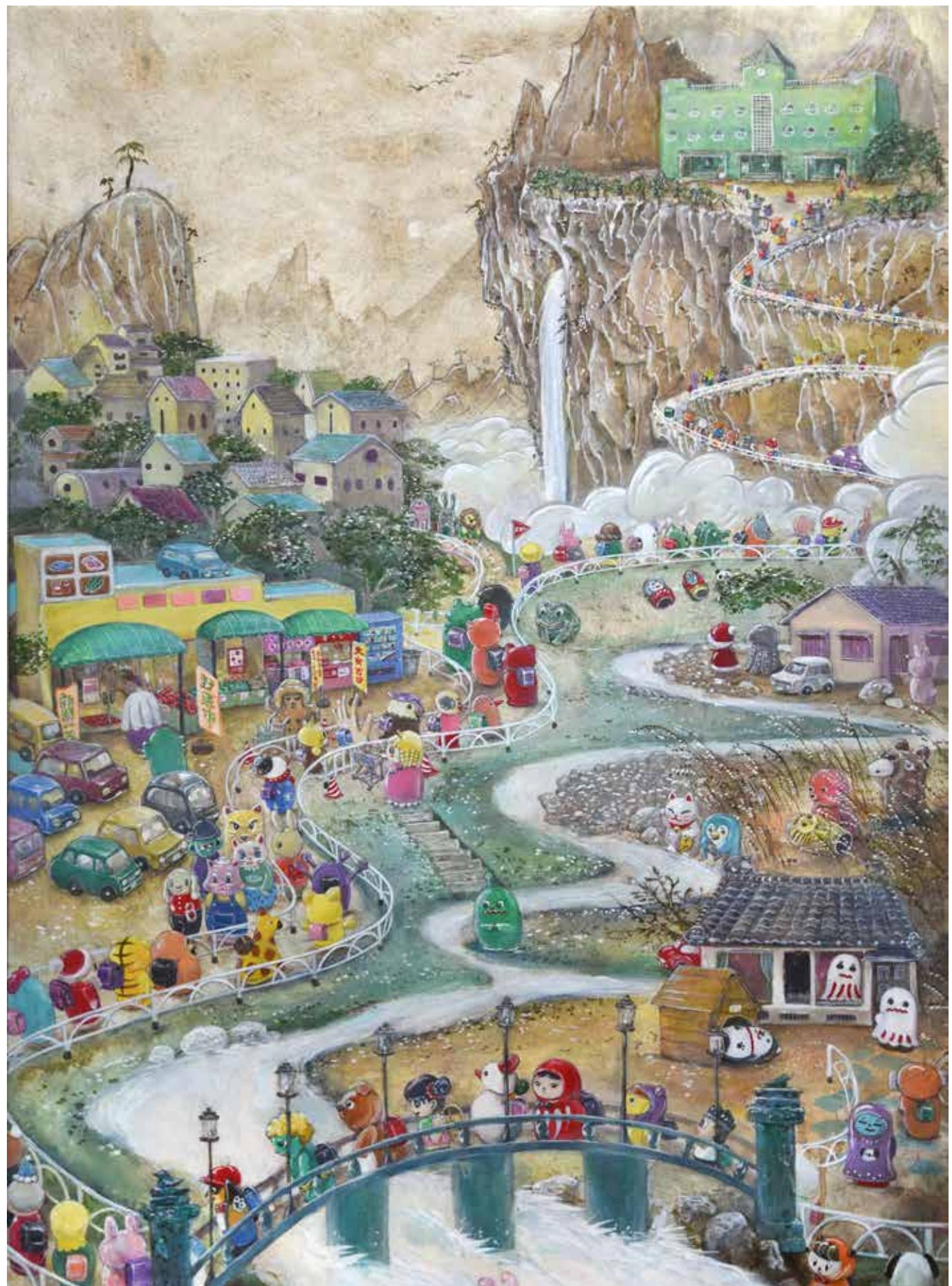
「開運安全熊手」

205 × 140mm / 紙・アクリル / 2019



「アツゲショウ」

私は左頬に生まれつきの青アザがあった。最初はコンプレックスを隠すために化粧を始めたが、いつからか社会のマナーとして義務的に化粧をするようになっていった。どちらの自分も使い分けて、うまく"化けてきた"ように思う一方で、化粧そのものへの違和感は未だに抱き続けている。どうやら私の顔は、知らず知らずのうちに生じた違和感によって、塗り重ねられているようだ。今回の展示では化粧というものに対して、相反する自分を表現する。



「ぞろぞろ登校図」

804 × 530mm / キャンバス・アクリル・インク・岩絵具 / 2021



「花に欲望」

606 × 606mm / キャンバス・アクリル・インク・岩絵具 / 2021





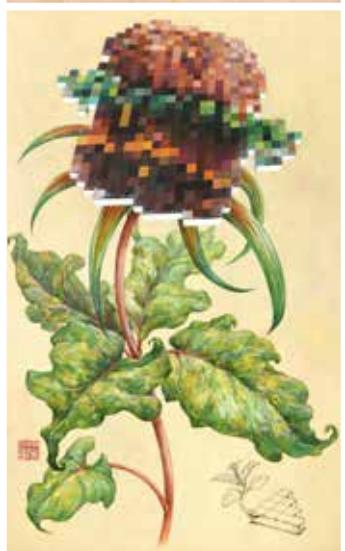
「かさなる部屋 はな ゆう とき」

803 × 1303mm / キャンバス・アクリル・糸・和紙 / 2021



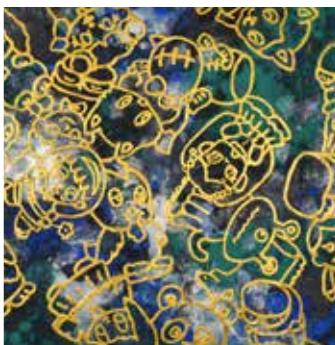
「かさねがさね」

新型コロナウイルスの影響によって、1、2年前が遠い昔のように感じるほど、生活は目まぐるしく変わった。ルールは日々更新され、一人ひとりの空間が与えられ、時間や空間を他人と共有することは殆どなくなってしまった。当時は特別だと思わなかつた普通の生活。—例えば、友人と集まつたり、帰省して近くの服屋で掘り出し物のワンピースを買い漁ること—も、今となっては遠い過去となつた。それはまるで、大昔に生きていた生物やそれが付けた足跡が "当時の環境を表す化石" として、図らずも評価され、現代に残ってしまっているのと似ている。今回、無計画に "空間" を増やしていく行為を平面上で繰り返し、そこに個人が抱える風景を重ね、繋げていくことで、空間の変化や時間の経過を描く。



「理想工作」

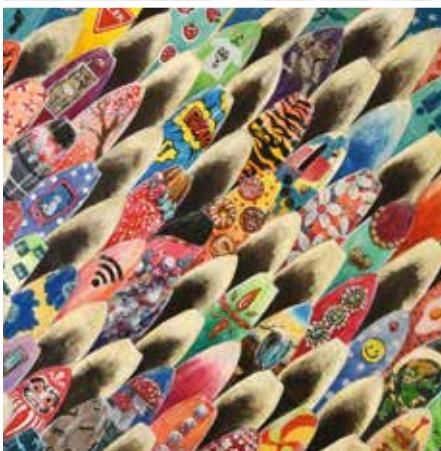
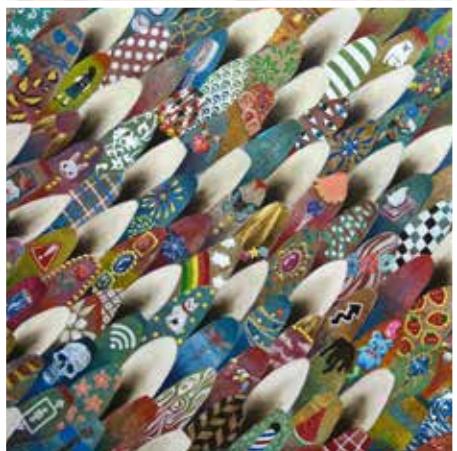
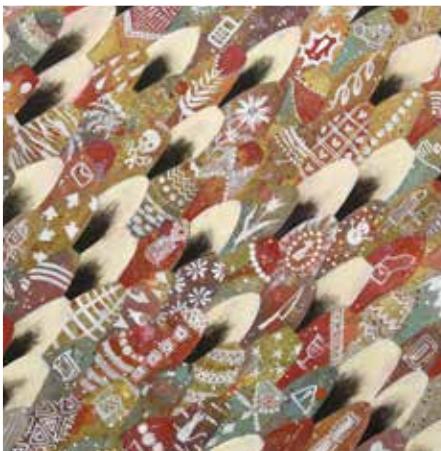
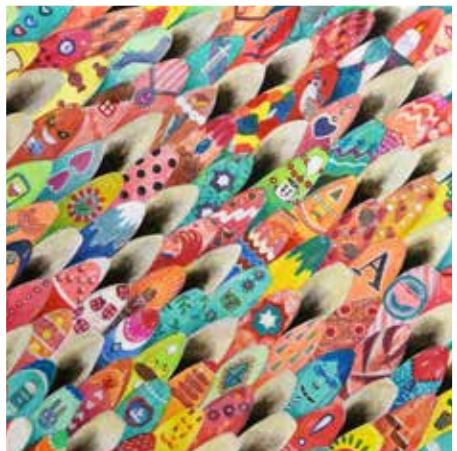
私は友人に対して「偽善者」と言ってしまったことがある。欠点のない善良な友人が私に投げかける言葉は、あまりにお手本のようで美しかったからだ。ドス黒い感情を微塵も出さない友人に対して、私は次第に疑いの目を向けていった。だが、そういう私も自分の内面を見せるのが苦手だ。本音を言って攻撃されるのが怖くて当たり障りのない答えを探す。もう一人の自分を設定して「もう一人の自分ならどうする?」と想像して振舞うことさえある。偽善者はどっちなのだろう。人は相手の言動や態度から、その人のイメージを形づくる。表面的なメールのやり取りだけであれば、もしかしたら理想的なイメージを相手に与えられるかもしれない。自分の本心にあるドス黒い感情を隠しつつ、何事もないように振る舞い、安全なポジションを探しながら生活していくことで自分の身を守っていく。理想的な自分の工作を、私はまだやめることができない。



「ごちゃごちゃ」

幼少期から強いられる集団行動やルールに従うことへの抵抗感から解放されて、自由奔放に動き回る指人形たちを表現したシリーズ作品。







「ツメコウボウ」

SNSの普及によって、以前よりも他人との関係を構築する機会が増え、簡単に自分の情報を誰かに発信できるようになった。一方で、自分の予期しないところで、私的な情報を相手に知られることもあり、危険から自分の身を守ることを強く意識していくことが増えた。爪は、元々は生物が生存するために必要な器官であり、自分の身を守るための武器であった。今はネイルアートのようにファッショントとして楽しむものになっているが、これらも生物的な爪の機能の延長線上、つまり自身の意思を誰かに示したり、鎧のように自分の身を守る役割を持っていると言えるだろう。危険な状況や他者に対し、防御や攻撃、威嚇としての役割を持った『爪』を、全身を纏う鱗のように描く。

